



YAMAGA

近代の山鹿の
偉人たち
シリーズ

024

若くして急逝、日本画で新たな境地を開拓（一八七五～一九二二）

高橋 廣湖

たか

はし

こう

こ

高橋廣湖（本名浦田久馬記）は、山鹿市松坂町で画塾を営む浦田家の長男として生まれる。父の浦田長次郎（号観松堂雪長・雪翁）は城北地区の神社の絵馬にその名前を多く残している。また、弟の浦田四郎（号廣香・湖月）は八千代座の天井広告画の絵を描いた。

東京の有名な名妓で女優の今紫（本名高橋こう）が熊本市の東雲座で公演中、廣湖は舞台上で華麗に舞う今紫の踊りを毎日通いスケッチしていた。その絵を見た今紫に才能を認められ、明治三十年に上京して養子となり高橋家を継ぎ、本格的に日本画の勉強を始める。このことは当時の新聞に美談として掲載され話題をさらった。

歴史画の大家の松本楓湖の門に入り、めきめきと腕を上げ、その名の一字をもらい廣湖と号した。歴史画を中心に、仏画、美人画、花鳥画、山水画、風俗画など幅広いジャンルの優れた作品を手掛ける。伝統的な日本画を基本に西洋画の表現を加味した和洋折衷の画風が特徴。横山大観たちとともに活躍したが、惜しまれつつわずか三十七歳の若さで急逝した。日本画家で同じ郷土熊本出身の堅山南風の師でもあり、日展の重鎮として活躍した浦田正夫の伯父である。

生いたち

高橋廣湖（浦田久馬記）は明治八年（一八七五）四月一日に、熊本県鹿本郡山鹿町字松坂（現山鹿市山鹿）で、父浦田長次郎、母登喜の長男として生まれました。

父の浦田長次郎（弘化三年〜大正二年）は、雪翁、雪長と号し、同所で画塾「観松堂」を営んでいて、山鹿を中心にたくさん絵馬に名を残しています。のちに次男一二、三男龍雄、四男四郎、長女梅が生まれ、五人兄弟の中で、長男の久馬記、次男の一二（号天鹿）、四男の四郎（号廣香、湖月）が画業を継ぎました。

父の長次郎は、当時の細川家のお抱え絵師であった雪舟流雲谷派、矢野家第六代の良敬に学んだといわれています。

廣湖は幼少のときから、絵描きを生業とする家庭環境の中で育ち、



廣湖の生家付近

父の手ほどきを受け、めきめきと絵画の腕をあげていきました。

廣湖の家は、旧兼松往還沿いの旧豊前街道と旧兼松往還が交わったところから百メートルほど北へ下ったところに位置し、目抜き通りは多くの商家が軒を連ね、荷車や往来する人々で朝早くから夜遅くまで賑わっていました。約三百メートル南には大改修を終えて間もない桜湯がありました。また、近くには岩野川や吉田川も流れており、温泉や川で遊んだりして多感な少年期を過ごしたことでしょつ。

青年期

廣湖が十七歳のとき、山鹿町在住のちに阿蘇家に仕えた犬塚松琴（文政十年〜没年不明）の門に入り、南画を学びました。松琴は別号を鹿門・狂叟ともいい、人物、四君子、山水を得意とした人でした。

明治二十五年ころの美術は、全国的に見るとまだ南画が盛んで、熊本においても南画が最盛期のころでした。

廣湖はとにかく絵を描くのが速かったと、交友のあった画家や弟子の堅山南風（明治二十年〜昭和五十五年）らによって語られますが、このころ学んだ南画の技法の影響が大きかったと言えるでしょう。

二十歳になると熊本市に出て、当時、新鍛冶屋町にあった共進舎という美術研究所の教師になり、学校の先生や師範学校の生徒に絵を教えました。このころ、初号を天鹿と号し、絵の勉強に励みました。

運命の出会い

明治二十九年、廣湖が二十一歳のときでした。

東京の元吉原金平大黒屋で源氏名を今紫と称した花魁、高橋こうが、女優阪東かほるとして一座を引き連れ、熊本市の阿弥陀町の東雲座で公演が行われました。

今紫は、白拍子静御前の舞を得意としており、彼女の艶やかな舞に多くの男性が目を奪われました。

ある日のこと、今紫が舞台上で踊っていると、客の中に自分の舞姿を一心にスケッチしている青年がいることに気づきました。

付け人に尋ねると昨日もおとといも絵を描いていたといいます。訳を知りたくてその青年を楽屋に招待して聞くと、「実は私は画に



晩年の高橋こう（今紫）
大正元年撮影

志しているもの。静御前を舞われていると聞いて、昔の風俗を研究するために来ております」と顔を真っ赤にして答えました。スケッチを見せてもらおうと今紫はその出来栄えに感心してしまいました。

その青年が高橋廣湖で、今紫（本名・高橋こう）はのちに廣湖の養母となり、物心両面から廣湖を支えます。

この廣湖と高橋こうの運命的な出会いが、一地方の画家でしかなかった廣湖が中央画壇で活躍する活路となりました。

東京へ

廣湖の画才に惚れ込んだ高橋こうは、山鹿に向き、父の浦田長次郎に会い、廣湖を東京に出して、本格的に絵の勉強をさせたらどうかと勧めました。

最初反対だった長次郎も、廣湖の熱心な説得により賛成してくれましたが、廣湖は一年前の明治二十八年に妻敏子と結婚して一児があり、見知らぬ都会の東京へ妻子を連れて行き、果たして生活できるであろうかという不安もありました。しかし、ついに意を決して上京します。廣湖が二十二歳のときでした。

明治三十年九月十六日、廣湖は単身で上京します。山鹿から乗合馬車で植木に行き、そこから汽車で門司へ、小倉より船で神戸に着き、二、三日滞在のあと再び船で横浜へ向かいました。

東京に着いた廣湖は、高橋こうの紹介により

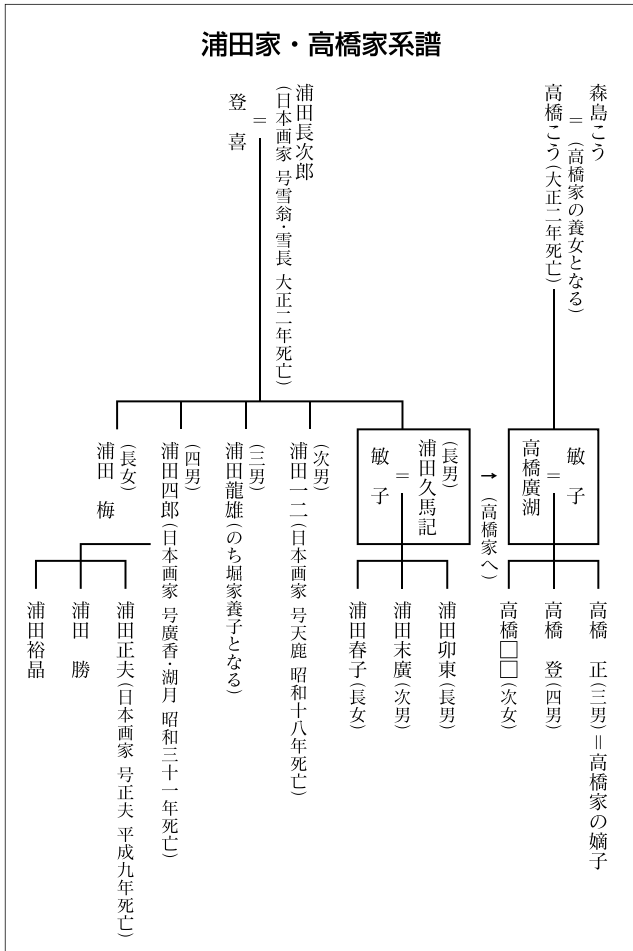
麻生笄町（現在の東京都港区麻布）の繁成寺に寄宿しました。繁成寺の暮らしは、父浦田長次郎にあてた手紙の中に次のように書いています。（現代文に訳）

「東京は都ではございますが、私が住む麻生笄町の笄橋の向かい側あたりにある繁成寺は、森林が茂りもの寂しいところでございます。繁成寺はこの者なら誰でも知っております。朝は六時ころから同寺に集まってくる老人たちの念仏木魚の音、お香の煙が途絶えることがなく、池上本門寺妙本蓮華經の太鼓の音や青山鎮台（麻生歩兵三聯隊）のラッパの響き、また、品川あたりの船の汽笛がはるかに聞こえ、誠に神仙鏡にいるような心境でございます。（中略）

先日は浅草の観音様、本日は上野美術館を詳しく鑑賞してまいりました。帰りにはいつも朝倉橋から日本橋、京橋付近のまちの様子を観察しながら戻ります（中略）

業を積み、一刻も早く錦を着て帰郷致したいと思っております」その後、歴史画の大家である松本楓湖の画塾「安雅堂」に入門します。安雅堂では、多くの門弟たちと生活し、誰より早く起きて筆

浦田家・高橋家系譜





青砥藤網探銭図 (明治三十年)

を執り、夜は毎日十時近くまで絵を描きました。菊池容斎の描いた歴史画の模写などに明け暮れ、刻苦勉励し、めきめきと腕を上げていきました。

このころ廣湖は天鹿の時代に、西洋画の陰影法の影響を受けたといわれる《青砥藤網探銭図》(明治三十年)を描いています。

明治三十三年には安雅堂から独立し、やがて一軒家を浅草に構えることになった廣湖は、師匠の松本楓湖から「廣湖」の雅号を授かりました。これから本格的な画道への精進が始まります。

この年、「異画会」、「美術院廿十会」に参加し、高橋廣湖の画名で日本美術院展(日本絵画協会共進会)に《天孫降臨》を出品しました。

高橋家の養子に

廣湖は上京後、高橋こうの援助を受けながら、絵の制作にあたりました。そして、ついに妻敏子と子どもともども、高橋家の養子になり、高橋姓を名乗ることになりました。

廣湖は浦田家の長男であり、当時の明治憲法のもとでは、長男の養子縁組は認められていませんでした。

「知能低く浦田家相続の能力なし」として明治三十三年三月二十八日付けで、やっと浦田家を継がなくてよいことが法的に認められます。しかし、正式に養子縁組が認められたのはずっとあとのことで、明治三十九年六月二十八日、戸籍上正式に「東京市浅草三好町十番地 高橋こう」の養子になりました。

中央画壇で活躍

廣湖は、明治三十年代中ころから亡くなるまで、異画会の中心的画家として活躍しました。

異画会は、当時新鋭の画家たちの美術結社で、のちに文展登龍門として一大勢力を誇っていきます。

幹事として廣湖と肩を並べていた鏑木清方、安田靉彦、小室翠雲、菱田春草たちは、みな名声を博しました。

そのほか、初期日本美術院、紅児会、二葉会などにも参加し、画壇的地位を着実に築いていきました。

廣湖が明治三十五年から明治四十年に発表した作品には次のようなものがあります。

- 明治三十五年▼《貴賤苦楽》(日本美術院展銅賞)、明治三十八年▼《馬上の不意》(女風呂)(日本美術院展)・《葉狩》(内国勸業博覧会)、明治三十七年▼《女軍》《浪速鴻》(紅児会)、明治三十八年▼《傷心》《如花》《金鶏靈祥》(異画会)・《裂封冊》(紅児会)・《寛》(二葉会)・《豊公》(二葉会)・《はたはた》(美術院一等賞)・《真間の手古茶》(歴史風俗画会)、明治三十九年▼《野分の朝》《鶴》(異画会)・《蒙古襲来》(紅児会)・《大慈大悲》(二葉会銀賞)・《品川の凱旋》(歴史風俗画会)・《大業子忠節図》(和洋画展覧会)、明治四十年《来れ敵》(東京勸業博覧会二等賞)

第二回文展、搬入間に合わず、自ら個展を開催

明治四十年、この年に開設された第一回文展出品に関する廣湖のエピソードがあります。

このとき廣湖は平重盛が父・清盛を諫めようとする場面の《重盛諫言図》を制作し、文展に出品しようと準備していましたが、凝り性の彼はなかなか完成にいたりません。そこで廣湖は作品をまず搬入し、夜に展覧会場に忍び込み未完成箇所を手直ししようとたくらみ

■青砥藤網探銭図 (明治三十年) 熊本県立美術館蔵

廣湖が初号の天鹿時代の作品として注目されるものです。人物の描写に見られる陰・影の表現の仕方が特徴で、陰影法という西洋画の影響を受けた作品と想定されます。青砥藤網は鎌倉時代の政治家で、藤網の徳を語るものとして、歴史画・教育画の画題として好まれました。ある夜、藤網は誤って滑川に十銭を落としました。藤網は従者に命じ五十銭を払って松明を買い、川を照らしてお金を探させます。世間の人は、大を失い小を得たことを嘲笑しましたが、藤網は「十銭は少ないが、これを失えば永く天下の貨幣を損出することになる。五十銭は私にとって損出ではあるが、他人を益するであろう。併せて六十銭は世間のためには大きな利益になる」と論じたと いわれます。



重盛諫言図 (明治四十年)



蒙古襲来 (明治三十九年)

ます。弟子の亀井啓三郎(号琴仙)を伴い、ランプと筆、絵の具を持って館内に忍び込みます。途中に警備員が巡回してくるので、警備員が来るとランプの灯りを消し、遠ざかるとまた灯りをつけて作業を続けました。しかし、とうとう作品は完成しないまま夜が明けてしまいます。仕方がなく家に持ち帰り、完成後改めて搬入しようとしたが、締め切りを過ぎていることを理由に主催者側から出品を拒絶されてしまいました。

廣湖にとってこの《重盛諫言図》は自信作であったため、出品を拒まれたことは相当、身にこたえたようです。

落胆している彼のことを聞きつけ、のちに東京市長となる後藤新平はわざわざ廣湖のアトリエを訪ねてきて彼の絵の出来栄を観察しました。「これほどの名作を埋もらせるのは惜しい」と廣湖の絵に感銘を受けた新平は、自らが奔走して個展を開いてくれました。今でこそ個展はどこでも普通に行われていますが、当時としては

珍しかったようです。展覧会は美術館前の赤十字館跡で明治四十年十一月十六日から二十日まで開催されました。各新聞のトップ記事となり、同じ時期に、会場前の美術館で行われていた文展の人気をさらいました。

そして、明治四十二年には、帰郷し初の郷土の個展を熊本市物産館で開催。また、明治四十四年には異画会主催による「高橋廣湖作品展覧会」が東京上野竹の台陳列館南側で行われ、廣湖作品百二十点が展示され、好評を博します。

このころ廣湖の画家としての実力が世に認められ、中央画壇において確固たる地位を築き上げました。

日本画で名実ともに確固たる地位を確立

明治四十一年から異画会展覧会は、東京府知事が審査員を任命することになります。廣湖も明治四十三年、明治四十四年、明治四十五年と三年にわたり審査員として任命されました。

晩年(明治四十一年〜明治四十五年)には次の作品を発表しています。

明治四十一年▼《都の春》(異画会二等賞銀牌)・《加茂競馬(馬上の善)》(国画王成会)、明治四十二年▼《相撲》(異画会二等賞)、明治四十三年《十八公磨得度図》(異画会二等賞)・《少将尹衡》(文展)、明治四十四年▼《征途》(異画会二等賞)▼明治四十五年《楯人宿弥》(異画会二等賞)・《逢阪山》(十五大家三幅対展覧会)

また、このころ廣湖の早描きの技が活かされ、大相撲の好取組みの瞬間のスケッチが報知新聞の夕刊の紙面を飾り、読者に好評でした。これが縁で同新聞に連載された講談水戸黄門記や徳川栄華物語の挿絵を描きました。

明治四十二年には、熊本で同郷の山中神風が企画した高橋廣湖社中の展覧会を手伝ったのを機に、堅山南風が上京、その神風の紹介で廣湖に師事し、本格的な画業のスタートをきります。南風は廣湖

■蒙古襲来・大葉子忠節図 (明治三十九年)

廣湖は明治三十三年から三十九年にかけて五・六歳の裸婦をモチーフにした作品を描いています。浅草三好町に住んでいたときは、家の隣が風呂屋で、その女風呂の様子を描いた作品を展覧会に出し、当時の社会情勢から賛否両論があったそうです。それがきっかけで名が広まり、「廣湖」呼号のきっかけとなりました。

日本画の分野で当時、裸婦を登場させるのは珍しく、《蒙古襲来》と《大葉子忠節図》の二つの作品で見ると、明暗の調子を整えた量感ただよふところに西洋画の影響を受けていることがうかがえます。廣湖の前衛的な絵画精神のあらわれを感じ取れる作品です。

が亡くなるまでのわずか三年ではありましたが、師匠のもとで真剣に絵の勉強をしました。その後、南風は大正二年の第七回文展で《霜月頃》が最高賞に輝き、一躍注目を浴びます。以後は横山大観に師事し、日本美術院で活躍しました。

突然の死

《重盛諫言図》の個展を開催したのが縁で、朝鮮公使花房義質の一代記を描くことになりました。廣湖は、明治四十五年五月十日に東京を出発し、取材をかねて朝鮮、満州の視察の旅に出かけます。五月十二日に門司港から釜山に向かい、仁川、奉天、大連などを見て回り、五月二十八日自宅に戻りました。

視察では、朝鮮や中国の歴史遺産や風景などが大層気に入り、その行く先々で多くのスケッチを描きました。

その強行スケジュールが災いしたのか、旅先の大連で発熱に見舞われます。帰宅後も高熱が下がらず、当初は風邪かと思われましたが、悪性の猩紅熱におかされてしまいました。

廣湖の愛弟子の堅山南風は、亡くなる前に廣湖からすぐ来るようにと速達を受け取っています。「何事かと飛んでいくと、廣湖先生は顔を真っ赤にして苦しんでおられたが、『風邪を引いて熱が高い。すまさんが明日の分を描いて報知に出してくれ』といわれた」と南風が語っています。報知とは当時掲載していた報知新聞の挿絵の依頼でした。

それから病状は悪化して、ついに明治四十五年六月二日午後一時ころ、東京湯島天神町の自宅で家族に見守られながら永眠しました。享年三十七歳の若さでした。

廣湖の死は惜しみても余りあるものでした。翌日からの各新聞（六月三日付東京朝日新聞・やまと新聞・二六新報・萬朝報・読売新聞・報知新聞、六月四日付報知新聞、六月五日付九州日日新聞・大阪日報、六月八日付九州新聞）などで報道されました。墓は東京

ちよつと「リラム」①

浦田家 雪翁〜廣湖〜正夫

廣湖の父の浦田長次郎は、山鹿市や熊本市植木町などの神社に観松堂雪翁雪長の号で、たくさんの絵馬に名を残しています。絵馬の起元をたどると、古代では生馬を神に献上していましたが、それが木馬に変わり、平安時代ころから板に馬の絵を描くようになりました。

その後鎌倉時代ころから馬以外の三十六歌仙などが登場し、室町、江戸時代になると、武者図、合戦図、神話図、神仏・神社図、風景図などさまざまな題材で描くようになりました。

当時村のお宮の拝殿は、絵画の絶好の展示会場であり、画家たちは神に捧げる絵馬を精魂込めて制作しました。村の人たちはここで画家の評価を聞きつけ、評判の良い画家に制作を依頼しました。山鹿市近郊に、観松堂一門の絵馬が非常に多いということは、画家としていかに名声があったかを物語っています。

浦田家は当時、この界隈で、絵かきさん、看板屋さんなどと呼ばれていました。

浦田長次郎は、大湖景雲など、多くの弟子を育て、彼の息子たちも、長男の久馬記(号天鹿、廣湖)、次男の二(号天鹿)、四男の四郎(号廣香、湖)と画業を継ぎました。

浦田家は、山鹿近郊の絵馬や西南戦争山鹿口の戦いの布陣図、八千代座の天井広告絵などを制作しており、板湯の広告看板などにも関係していたのではないかとわれています。

当時の城北地区の美術界で大きな位置を占めていました。

大正二年に長次郎が亡くなり、大正四年に浦田一家が上京すると、山鹿の観松堂を

守ったのが、長次郎の弟子の大湖景雲でした。長次郎からは、景雲は自分の五人目の息子だといわれ大層可愛がられました。不幸にして、中央画壇にこそ名を残すことができずして、優れた画才がありました。



北条泰時図絵馬 (観松堂雪翁作 明治四十四年)

景雲は昭和四十年二月十六日に七十三歳で他界し、城北地方の絵馬をほとんど手がけた浦田家一門の出生の地である観松堂は彼とともに終わりを遂げました。

四男の四郎は、大正四年に当時まだ五歳であった正夫を連れて上京しますが、画壇では目だつた功績を残すことなく昭和三十一年に亡くなりました。

しかし、息子の正夫は東京美術学校(現東京芸大)日本画科在学中から才能を発揮し、《展望風景》が帝展入選以来、もっぱら日展系の作家として、また、日展の理事、審査員、事務局長などの役員を歴任して活躍しました。

昭和五十三年、前年の第九回日展出品の《松》で、この分野の最高賞といわれる第三十四回日本芸術院賞を受賞しました。

浦田長次郎に始まる浦田家の画業の流れが、高橋廣湖に受け継がれ、廣湖は志半ばで他界しましたが、浦田正夫によつて、大輪の花が開き、美しく実を結びました。

正夫は平成九年、八十七歳で他界するまでに、たくさんの作品を残しています。

都大東区東上野六丁目の源空寺にあります。

大正二年には廣湖の没後一周年を記念して、巽画会の主催による「故高橋廣湖遺墨展覧会」が上野竹之台で開催されました。このとき、廣湖の活動の成果を収めた「故高橋廣湖作品画集」が制作されました。

■ 貴賤苦楽 (明治三十五年)「熊本県立美術館蔵」

六曲一双の屏風絵です。図は平安時代からの伝統を持つ京都の「葵祭」の様子で、公卿たちの行列と、それを路上で見守る庶民たちを描いています。その主題である御門の一行を中心に配しながら、近景に貧しい小屋の前で一行を見つめる庶民を大きく描き、西洋風景画の遠近法的な構図に仕上げられています。それまでの歴史画を風景画に捉えようとした廣湖の近代絵画としての革新性がうかがえます。薄塗りのパステルを思わせる色調は、横山大観や菱田春草らの色彩研究の成果によるものです。

ちょっとコラム②

八千代座天井広告画と浦田家

明治四十三年建設の江戸時代の歌舞伎小屋の様式を色濃く残す八千代座の天井(六十四枚)と欄間(二十一枚)には、当時、山鹿の商店などの描いた広告画が新調されました。これらの広告画は金色に光るガス式のシャンデリアとともに天井を飾って、八千代座に来るお客をびっくりさせました。

格子天井の広告画は、一コマ毎に丸い八葉の形の輪郭を描き、地色を群青色に揃え、その中に広告画を描くことで、全体的な統一感を出しています。

欄間の広告は一枚ガラスの上に広告画が描かれ、ガスの明かりを反射して輝いていました。このことは、当時八千代座側と看板屋が交わした見積書などにより新たに分かったものです。

現在の八千代座の天井にある広告画は、平成の大修理(平成八年～平成十三年)のときに、八千代座の設計者であり建設責任者の木村亀太郎の孫の田中佑一郎氏が所有していた三十三枚の下絵をもとに、山鹿の看板屋が手分けして制作にあたりました。

下絵は言い伝えによると、^{きむらめたろう}木村亀太郎をはじめとした複数の人が描きましたが、天井に上げる広告看板は誰が描いたのかわかっていませんでした。

平成十八年十一月から平成十九年二月にかけて山鹿市立博物館で、「山鹿の日本画展 絵馬から近代日本画まで」と題した浦田家の足跡をたどる企画展が開催されました。

このとき、田中氏の所有する資料整理をしていたところ、木村亀太郎あてに看板屋が出した見積書三通と契約書が見つかりました。見積書の二通は熊本市の看板屋さんでしたが、一通は山鹿の業者で「浦田湖月」とありました。契約書には共同請負人として熊本市細工町上田初平とともに山鹿町の「浦田四郎」の名前が列記してありました。天井広告画は二社共同で制作され、これにより浦田湖月が浦田四郎本人だったことが初めて分かり、浦田家が八千代座の天井広告画制作に関係していたことが判明しました。



浦田四郎は浦田家の四男で、日展の事務局長を務めた浦田正夫の父です。四郎はそのあと、菊池(隈府)の桜座の仕事をし、その二、三年後には家族で上京します。

さらに、浦田湖月名の写生帳のなかに、八千代座の天井広告画を描いている職人の絵や八千代座の道具部屋らしい風景を描いた絵も見つかりました。間違いなく、八千代座の看板製作に浦田家が関わっていたことが証明されました。

道具方の中に、浦田二(次)三郎という四郎らしき名前もあり、四郎は若いとき、八千代座の道具方として、芝居小屋の役者絵、看板絵、遠見(背景画)制作に携わっていたのかもしれない。

八千代座の天井広告画制作のスケッチ



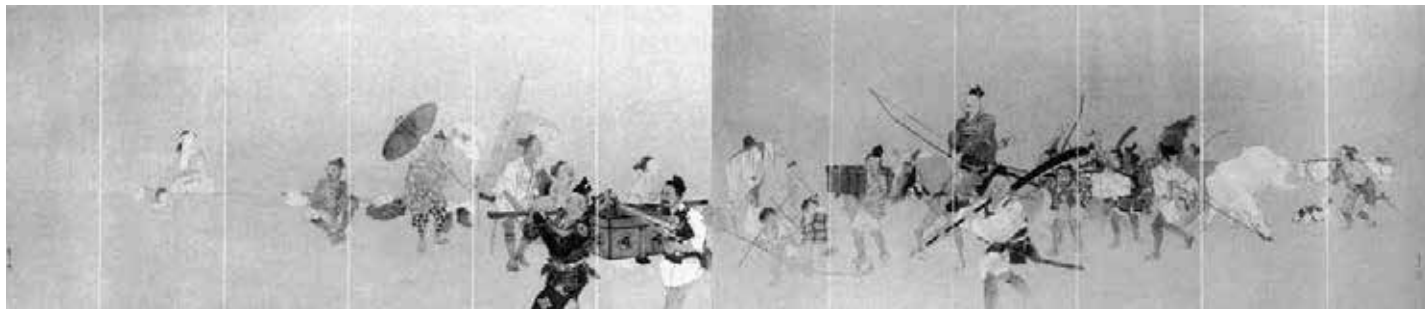
大葉子忠節図
(明治三十九年)

また、大正二年には廣湖の死を追うようにして、養母の高橋こう、父親の浦田長次郎が亡くなっています。廣湖が活躍したのは明治三十年くらいから明治四十五年までのわずかな期間でしたが、これまで歴史画を中心に、仏画、美人画、花

鳥画、山水画、明治の風俗画など幅広いジャンルで優れた作品を残しました。廣湖の作品の特徴は、伝統的な日本画を基本に西洋画の表現を採り入れた和洋折衷の画風で、新旧の中間派に属するといえます。廣湖の画業はその後、弟子の堅山南風をとおして、多くの画家たちに伝えられ今に生きています。



貴賤苦楽 (明治三十五年)



征途 (明治四十四年)

7

■ 征途 (明治四十四年)

カリカチュア的な人物描写は廣湖の作品の特徴です。廣湖のスケッチ手帳や朝鮮・満州に行った際のスケッチからうかがえるように、^{けいみょうしやだつ}軽妙洒脱な人物描写が構えて描くことない才能が天分として備わっていたことが分かります。この作品にその特徴がよく表れています。

年表 History

Table with 2 columns: Year (e.g., 明治八年, 大正二年, 昭和六十年) and Biography details (e.g., 四月一日、熊本県鹿本郡山鹿町松坂(現山鹿市山鹿)に、父浦田長次郎、母登喜の長男として生まれる。本名久馬記。父から雲谷派を学び、天鹿と号す。南画家、犬塚松琴に学ぶ。このころ、熊本市新鍛冶屋町で「共進舎」と称した絵画研究所で指導にあたる。妻敏子と結婚する。のちの養母となる高橋こう(女優名・阪東かほる)と出会う。当時熊本市の阿弥陀寺町の東雲座で地方公演があつてた。九月、単身上京。高橋こうの世話で、東京都麻布笄町の繁成寺に寄宿する。松本楓湖の画塾・安雅堂に入門し、内弟子となる。菊池容齋の模写に没頭する。安雅堂から独立し、松本楓湖から「廣湖」の雅号を授かる。三月十八日、浦田家産嫡の届出が受理される。浅草の人形師・安本亀八の二階を間借りする。浅草区三好町に一軒屋を借り、家族上京の準備を整える。京都・奈良に旅行し、各地の神社を訪ねる。高橋廣湖の画名で日本美術院展(日本絵画協会共進会)に「天孫降臨」を出品。このころ、「異画会」、「美術院廿十会」に参加する。日本美術院展(日本絵画協会第十二回共進会)に「貴賤苦楽」を出品、銅賞を受ける。日本美術院展(日本絵画協会第十五回共進会)に「馬上の盃」「女風呂」を出品。紅児会展に出品。第五回内閣勸業博覧会に「葉狩」を出品。紅児会展に出品。紅児会第五回展に「女軍」「浪速湯」を出品。異画会第六回展に「傷心」「如花」「金鶏畫祥」を出品。紅児会第六回展に「裂封冊」を出品。二葉会第四回展に「寛」を出品、二等賞九席を受ける。二葉会七月例会で三等賞、同八月例会で「豊公」が一等賞、美術院十二月廿日会で「はたはた」が一等賞となる。歴史風俗画会第三回展に「真間の手古奈」を出品。今村紫紅、村岡応東らとともに異画会総会の委員をつとめる。異画会第七回展に「野分の朝」「鶴」を出品。紅児会第七回展に「蒙古襲来」を出品。二葉会第五回展に「大慈大悲」を出品、銀賞を受ける。歴史風俗画会第四回展に「品川の凱旋」を出品。和洋画展覧会に「大葉子忠節図」を出品。このころ、書生として亀井啓三郎(讃岐出身、号琴山)を置いている。六月二十八日、戸籍上正式に、「東京市浅草区三好町十番地 高橋こう」の養子となる。下谷区二長町に転居する。東京勸業博覧会に「來れ敵」を出品、二等賞を受ける。玉成会(のち国画王成会に改称)の組織にあたり、発起人の一人となる。第一回文展出品のため「重盛諫言図」を描くが、間に合わず、後藤新平男爵らの肝入りにより文展会場前の赤十字館跡で同作品の展覧会を開く。異画会第八回展に「都の春」を出品、二等賞銀牌を受ける。松本楓湖、梶田半古、山内多門、安田敦彦らとともに、国画王成会審査員として岡倉天心より指名される。第一回国画王成会(日本絵画展覧会)に「加茂競馬(馬上の盃)」を出品。このころから報知新聞に掲載された徳川栄華物語の挿絵を担当する。異画会第九回展に「相撲」を出品、二等賞を受ける。日英博覧会出品のため、内務省から「本邦地方行政の模様」の課題で、今村紫紅とともにその制作を委嘱され、村の風教、経済、慣習、宗教等をテーマに奈良、伊豆へ取材旅行する。この年、帰郷し、熊本市物産館にて作品展を開催する。堅山南風上京し、廣湖に師事する。東京府知事から異画会審査員に任命される。藤原時代風俗研究のため奈良に旅行する。異画会十回展に「十八公磨得度図」を出品、二等賞を受け、宮内省買上げとなる。第四回文展に「少将尹衡」を出品、三等賞を受ける。本郷区湯島天神町に転居。東京府知事から異画会審査員に任命される。異画会十一回展に「征途」を出品、二等賞を受ける。異画会主催による「高橋廣湖作品展覧会」が上野竹の台陳列館南側で開催され、一二〇点を展示。東京府知事から異画会審査員に任命される。異画会十二回展に「楯入宿弥」を出品、二等賞を受ける。十五大家三幅対展覧会に「逢阪山」を出品(大観、春草、観山、広葉、玉堂、廣湖ほか)。花房義質子爵から依頼された「花房子一代記絵巻」制作の現地取材のため、五月十日に東京を出発し、同十二日門司港から釜山に向かう。十三日以降に京城、仁川、奉天、大連などをめぐり、五月二十八日に東京に帰る。六月二日、猩紅熱のため死去。享年三十七歳。六月四日、浅草北清島町の源空寺にて葬儀が行われる。熊本の近代日本画展(熊本県立美術館)昭和五十九年二月十一日〜三月二十五日、五点出品。山鹿市制三十周年記念「高橋廣湖と一門展」(山鹿市立博物館)昭和五十九年九月一日〜十一月三十日、十九点出品。「日本画の前途たち展」(東京都美術館)昭和六十一年十月二日〜十一月三十日、四点出品。「高橋廣湖館蔵展」(山鹿市立博物館)昭和六十一年十二月二十日〜昭和六十二年三月三十一日。「高橋廣湖展」(山鹿市立博物館)平成五年五月十七日〜十月二十八日。「山鹿の日本画展」(絵馬から近代日本画まで) (山鹿市立博物館)平成十八年十一月十八日〜平成十九年二月二十八日。

近代の山鹿の偉人たち 024

若くして急逝、日本画で新たな境地を開拓

高橋廣湖

平成 25 年 3 月 発行

山鹿市教育委員会 教育部 文化課

〒861-0501 熊本県山鹿市山鹿 156-3

TEL 0968-43-1691

執筆者

井上 欣也

参考文献・ご協力いただいた方(敬称略)

『研究紀要 1987 第1号』(熊本県立美術館)
『第八回熊本の美術展熊本の近代日本画』(熊本県立美術館)
『鹿本郡市の絵馬』(鹿本郡市文化財保護委員連絡協議会)
『今紫と高橋廣湖』(山鹿市立博物館蔵)
『廣湖逝去後の各新聞』(山鹿市立博物館蔵)
『広報やまが』原口長之氏執筆「ふるさと人物誌、高橋廣湖とその一門編」
『山鹿市史』下巻(山鹿市)
『新補山鹿市史』(山鹿市)
『八千代座100周年記念誌』(八千代座100周年記念事業実行委員会)
古家良一(熊本県立美術館)